



創刊の辞

時間の持続とともに

発行：2023年9月9日

安田 裕子 (TEA と質的探究学会 初代理事長)

2004年にうぶ声をあげたTEA（複線径路等至性アプローチ：Trajectory Equifinality Approach）が多分野の研究者や実務家にさまざまに活用される過程をへて、『TEA と質的探究学会』が組織化され、このたびその研究雑誌の創刊号が発刊された。おもしろい、使ってみたく、続々と参集くださる人びとのご関与、多学問・実践分野の智の集積の賜物である。何かが育つことの象徴的なありようであるかもしれない。

TEAを開発してきた側としても、学会を組織することは必然であった。TEAを用いて研究をしたいという人びとへの一対一対応による教育的関与には限りがあること、また、モデルとなる研究事例を、より多くの方に参照されるよう社会的に開いていく場が必要であることが、いつしか認識されるようになっていた。研究交流の推進と研究雑誌の発行という両輪により、TEAを用いて研究をしたいと考える人びとに資することの重要性が、痛感されていたのである。そしてこのたび、ついに研究雑誌の創刊号が発刊される運びとなった。多くの方のご尽力あってこそである。感謝の念に堪えない。

さて、TEAのコンセプトのひとつに「非可逆的時間」がある。決して後戻りしない持続する時間というものを見方を通じて、一見変わっていないようでも変容がとらえられてくる。動的な維持の過程ともいえよう。それは、「今」後の可能性を内包してもいる。「今」はそうした持続の時間に埋め込まれている。

私たちは「まさかこうなるとは思ってもみなかった」というような語り方をすることがある。それは、歩みを進めた「今」から振り返っての語りであるが、「今」もまたそうした可能性をあわせもつ。人の生のこうした豊かさが、TEAを用いた多様な工夫によって、描き出されてきた。同時に、そうした数々の研究実践の営みは、TEAの方法論的・理論的な進展を支えてくれてもいる。

当初、Equifinality（等至性）の概念に魅力を感じるも、私たちもまた、今に至るTEAの姿を想像していたわけではない。このこと自体が感慨無量であるとともに、「今」後のTEAの質的研究法としての深化が楽しみでもある。それは、TEAによる経験・現象の可視化に可能性を見いだす人びとの研究実践の挑戦と蓄積に、ゆだねられてもいる。

